

J.S.バッハの100年前に生まれ、「ドイツ音楽の父」といわれる作曲家ハインリッヒ・シュッツ(1585-1672)。その名を冠した大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団をはじめ、大阪コレギウム・ムジクム(OCM)所属の3団体による第45回定期演奏会が、今年度の大阪文化祭賞・グランプリを受賞した。結成以来バロック音楽の源流を求め続けた大阪の音楽集団が、現代音楽の新たな可能性をも開花させたのであった。

独自の構成で聴衆を圧倒

グランプリ受賞公演は、平成23年6月26日、いづみホールで行われた。当間修一氏率いる大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団と大阪コレギウム・ムジクム合唱団、シンフォニア・コレギウムOSAKA(室内管弦楽団)の総勢100名近くが出演した『第21回現代音楽シリーズ』である。

冒頭、シュッツが1625年に発表した教会音楽『カンツィオーネス・サクレ』から4曲をア・カペラで演奏し、さらにヘンデル22歳の作品『Dixit Dominus(主は言われた)』を弦楽合奏と合唱が共演。バロック音楽揺籃期のイタリアで修行した成果をドイツで広めようとしたシュッツと、才気溢れるヘンデルの若く燃える情熱や使命感を彷彿させた。つづく武満徹作曲の室内オーケストラ作品『雨ぞふる』では、現代音楽を象徴する武満トーンでホールの空気を一変させ、最後の千原英喜作曲「混声合唱のための『ラプソディー・イン・チカマツ』』では、近松門左衛門が描いた日本人の情念を独自の解釈でシアターピース(*)に仕上げ、舞台全体を使って歌いながら踊り、語り、観客の心を江戸時代の空気で絡めとった。

こうした構成は、当間修一氏率いるOCMならではのもの。『バロックは現代(いま)の音楽へ!』という公演タイトル通り、音楽史におけるルネサンス期(声の時代)からバロック期(楽器の時代)にいたる様式の変遷、そして現代におけるシアターピースの演出手法を得て再び「声」へと回帰するさまを、その超絶的な技巧をもって堪能させたのであった。

バッハの源流をたどる

当間氏は、大阪音楽大学在学中よりバッハの音楽に傾倒し、卒業後も教会オルガニストおよび通奏低音奏者として活躍。1975年に大阪コレギウム・ムジクム(ラテン語で「音楽集団」の意)を創設し、バッハにいたるドイツ音楽の源流を追究するなかでシュッツに行き着いた。76年に「アンサンブル・シュッツ(現シンフォニア・コレギウムOSAKA)」、77年に「大阪ハインリッヒ・シュッツ室内合唱団」と「大阪コレギウム



大阪コレギウム・ムジクム(平成23年6月26日・いづみホールにて/写真提供:大阪コレギウム・ムジクム) 大阪H.シュッツ室内合唱団員は毎年オーディションによって厳しく精査される。文化庁芸術祭賞音楽部門優秀賞(1998年)などを受賞。

平成23年度 大阪文化祭賞・グランプリ受賞
当間修一氏 主宰「大阪コレギウム・ムジクム」
大阪からバロック音楽の原点を発信

ム・ムジクム合唱団」を設立。日本でほとんど紹介されていなかったシュッツ作品を大阪の地から発信すべく、340回にわたるマンスリー・コンサートや年3~4回の定期公演(いづみホール)を行い、今年で36年目を迎える。

初めてのドイツ演奏旅行は1989年。ハンブルクやフランクフルトなど5か所を回り、ドイツ人評論家から「ドイツ、ヨーロッパにおける様式を完全にマスターしている。我々ドイツ人は彼らのドイツ語を見習うべきだ」と絶賛された。しかし、その言葉に続いて「あなた達の音楽を聴かせてほしい」といわれたことが、当間氏に大きなショックと転機を与えた。

新たな可能性を開拓

ドイツ人には、『荒城の月』や『ソーラン節』ですら19世紀に完成した西洋音楽の亜流でしかないと思われ取られた。彼らが求めたのは、OCMでしか聴けない音楽だったのである。これを契機に、ドイツ人を唸らせ、日本人をも魅了する日本の音楽を探し求めた当間氏は、日本におけるシアターピースの先駆者・柴田南雄(1916-1996)と運命の出会いを果たす。

当間氏は柴田氏と親交を重ね、1993年、柴田作品をもって再びドイツ公演に挑むや、観客からは前回にも増して総立ちで絶賛された。以来OCMは、シュッツにはじまるバロック路線に加え、シアターピースの新たな可能性を開拓している。「新しい作品が出てきたら、それをもっと良い形で上演できるように成長していきたい。そしてなにより大阪で聴衆を増やしていきたいですね」。当間氏のひたむきな言葉に、イタリアの音楽文化を自国ドイツで昇華させたハインリッヒ・シュッツが重なる見えた。

(ライター 三上祥弘)

*シアターピース:出演者がステージだけでなく客席にも降り、ホール全体を音源化する演出手法。聴衆をあらゆる方向から圧倒的な声の迫力で包み込む。



当間修一氏
(大阪コレギウム・ムジクム主宰、常任指揮者)
「大阪は私の音楽活動を育ててくれたところ。グランプリ受賞は、その長年の活動が認められたという格別な思いがある。これを契機に私たちの発信力にも一層弾みをつけたい」

—安藤忠雄文化勲章受章記念—

大阪を元気にする講演会

建築家・安藤忠雄氏の文化勲章受章(平成22年11月)を記念する講演会『大阪を元気にする講演会』が、今年3月31日、大阪国際会議場で開催された。主催は同実行委員会(関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会、大阪国際フォーラム、大阪21世紀協会)。一般人や学生など3,000人の来場者があり、国際会議場メインホールだけでは収まらず別途モニター会場も用意された。

安藤氏は講演で、これまで手がけた国内外のプロジェクトを紹介しつつ、「新しいことに挑戦することで明日の自分を面白くする」「前向きに生きていけば問題が起きても解決しようという意識が働く」「依頼されたことだけを考えるのではなく、自分の仕事の境界を越えて考え、チーム力で切り拓いていく」など、自身の経験にもとづく思いを語り、「100歳まで好奇心をもって生きよう」と呼びかけた。また、東日本大震災で親を亡くした多くの子どもたちを思い、この震災を日本人全員で受け止めて乗り越える気持ちの大切さを訴えた。



安藤忠雄氏



来場者で埋め尽された大阪国際会議場メインホール

演劇の伝統と共同体の関係を議論

国際演劇学会大阪大会

世界50か国から約330人の研究者や大学院生が参加した『国際演劇学会大阪大会』が、今年8月7日から12日までの6日間、大阪大学豊中キャンパスで開催された(事務局 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室)。

国際演劇学会は演劇やパフォーマンス研究者を中心とする国際学会で、1957年に設立。現在、世界50か国以上にメンバーがいる。最近5年間には、ミュンヘン大学(ドイツ)、リスボン大学(ポルトガル)、中央大学(韓国)、ステレンボッシュ大学(南アフリカ)、ヘルシンキ大学(フィンランド)で大会を開いてきた。今年は“伝統・革新・コミュニティ”をテーマに、演劇における伝統性やそれを育む共同体、社会的装置としての演劇の役割などが議論された。また、能勢人形浄瑠璃や宝塚歌劇団月組公演などの観劇会も開催され盛況だった。



大阪大学豊中キャンパスにて

大阪文化祭賞受賞者決定

「大阪コレギウム・ムジクム」がグランプリを受賞

芸術文化活動の奨励と普及を図り、大阪の文化を振興する目的で開催されている毎年恒例の大阪文化祭(主催:大阪府、大阪市、大阪21世紀協会)。今年度は、5月から6月の2か月間にわたり大阪府内で行われた伝統芸能や現代演劇、大衆芸能、洋舞、洋楽など55公演を対象に、厳正な審査を行った結果、下記各賞の受賞者を決定した。

平成23年度大阪文化祭賞各賞受賞者

大阪文化祭賞・グランプリ

大阪コレギウム・ムジクム(合唱・管弦楽) ※P15に記事

大阪文化祭賞

善竹隆司・善竹隆平(狂言)、二代目京山幸枝若(浪曲)

大阪文化祭賞奨励賞

吉田幸助(文楽人形遣い)、打打打団 天鼓(和太鼓)、井上綾乃(ピアノ)、浦田恵子(声楽)



大阪文化祭賞贈呈式(8月26日・大阪市公館)